

渡辺幸博先生の学問と人柄

鯨坂 真

本学哲学科の渡辺幸博先生が古稀を迎えられた。ますます御壮健で旺盛な研究意欲を持ち続けられておられ、近く新刊の書も出されるとのこと、一層の御活躍が期待されることである。しかし本学では古稀に達せられることは、学年末をもって専任教授の職を御退任になることになっていたので、後進の私たちとしてはまことに寂しい限りである。関西大学哲学会としては機関誌『哲学』一八号を先生の古稀記念論集として献じることにした。

渡辺先生は熊本県阿蘇郡生れであるが、御父君の仕事の関係で中国大陸の大連・旅順で幼少の時期を過ぎられた。大連で小学校・中学校を卒業し、旅順高等学校に入学されたのは第二次大戦末期の一九四五年四月であった。同年八月一五日日本の敗戦により同校は廢校となり、以来四七年二月に舞鶴港に引揚げて来られるまで敗戦直後の外地での生活は筆舌に盡し難い苦難の連続であられたようである。その間に病を得られた御父君が大連阜頭收容所において、引揚船乗船を目前にして死去されるという御不幸にも遭遇しておられる。このあたりの若き日の体験が後の哲学者としての渡辺先生の実存的原体験となつているところがあるであろうと拝察される。

郷里熊本県に引きあげて後、四八年四月に鹿児島農林専門学校（現鹿児島大学農学部）獣医畜産学科に入学された。卒業して獣医の資格を得られて、五二年九月より、大阪府家畜保健衛生所に勤務される。以後十五年間、大阪

府下の家畜保健衛生関係の第一線の仕事に従事されながら、文学・哲学への関心を深めて、五三年四月より大阪外国語大学仏語別科に入学され、同校修了後五四年四月には関西大学文学部哲学科（二部）に三年編入されて、卒業後は大学院文学研究科哲学専攻に進学され、修士課程から博士課程の単位を修得された。このような御経歴からうかがわれるのは、戦争の惨禍の中から生活を建て直すという苦勞を担いつつ、同時に哲学にたいする向学心を一筋に育て上げ、研究者としての自己を形成してこられた渡辺先生の旺盛な探求への熱意と並々ならぬ努力の軌跡である。

関西大学および同大学院在学中、岡野留次郎教授、大小島真二教授、藤本是教授など関大哲学科の今日を築いて来られた先輩諸先生との幸運な出会いがあったことも重要な意味をもっていたと思われる。夜の講義終了後、時には夜を徹して、中の島公園などで話しこんだという学生時代の挿話は今も語り草となっているほどであり、このようにして渡辺先生は関西大学哲学科の良き伝統の継承者としての自己を築いて来られたと言いうるのである。

六四年四月より関西大学非常勤講師、六七年四月より同文学部専任講師に就任された。以後三十一年間、先生は研究と教育に献身してこられ、その功績はまことに大なるものであった。渡辺先生の研究テーマの中心は現代フランス哲学であったが、サルトル哲学を中心としつつ、マルクス主義から構造主義・ポスト構造主義までを視野に入れ、現代思想の中心課題に切り込んだ雄大な研究であり、著書八冊と論文数十篇を書かれたのであった。中でも学位論文となった『サルトルとポスト構造主義』（一九九二年八月）は実存主義から構造主義・ポスト構造主義へと展開していったフランス現代哲学を精緻に分析し、その中から現代文化の諸問題あるいは現代的な存在についての自己の見解を述べられたもので、今後この分野を研究する人々にとっての基本文献の一つとなるものであると思われる。

先生はフランス現代哲学だけでなく、ニーチェ、フッサール、ハイデガーなどのドイツ哲学についても深い造詣を持ち、著書・論文の中でたびたび言及しておられるが、さらに近年では古代ギリシアから古代インド、古代イスラエルの文化にも関心をもたれ、神話学や聖書学の研究から哲学以前の知の生成、そこからの哲学の誕生と近代的知の形成についての歴史的文化的的研究にも筆をすすめておられるところである。また先生は英語・フランス語・ドイツ語からロシア語・中国語にわたる優れた語学の才を駆使して何冊もの翻訳や評論なども書かれている。

教育の面においては、暖かいお人柄と懇切丁寧な学生指導は並々ならぬものであり、多くの後進を育てられた。また学内役職も学部相談主事、学生部長代理、入試実行委員会副委員長、保健体育委員会委員長など要職を歴任され、その功績はまことに大なるものがあつた。いわゆる大学紛争時の学生部関係の役職は相当な激務であつたと思われるが、先生はいつも笑顔を絶やさぬ余裕ある態度で淡々とその衝にあたられた。

その旺盛な御活躍は私たち後進にとつてのよき刺激であつたが、幸いにして御健康にも恵まれておられるので、今後とも大いに御健筆をふるつて学界を裨益して頂きたいと思う。

いささか私事にわたり申訳ないが、小生が関大の専任教員に採用されたのは渡辺先生と同年であり、研究室もずっと隣室であつた。私生活の面でもよき先輩であり、特にスポーツでは直接指導して頂いたことが度々あつた。初めて教員組合のスキー行事に参加した時、そもそもスキーをどうはくかどう歩くかを教えて下さつたのも、また夏山登山で学生たちと共に初めて上高地から西穂独標まで連れて行って下さつたのも先生であつた。その後、奥穂高、槍ヶ岳、あるいは黒部川の源流から黒部五郎、三俣蓮華、双六の縦走など北アルプスの山々に同行させて頂いた。

私たちの学生時代はスキーも登山もまだあまり一般的ではなかつたので、未経験の私などはスポーツの楽しさに

はじめて開眼させて頂いた。学問研究に集中しながら、しかるべき時には直ちにスポーツで気分転換をするなど、切り換えのよさも渡辺先生の特徴であり、私などは大いに学ばせて頂いた点である。

先生が今後ますます御壮健で、学界において後進の私たちに指導を賜り、また学究としての生き方のよき模範を示し続けて下さることを念願する次第である。